

アメリカン・イディオムの追究

William Carlos Williams を起点に

吉田亜矢

はじめに

William Carlos Williams (1883-1963) は、出身地のニュージャージー州ラザフォードに町医者を生業として定住し、モダニズムに逆行するかのごとく、アメリカの日常を、アメリカの話し言葉で書くことにこだわり続けた。定型詩でなくとも詩にはリズムを測る何らかのものさしが必要であると考えた Williams は、独自に考案した variable foot なる撞着語法概念を用いて、脚・行・連の階層的セリーを引き上げることでアメリカの口語に相応しい詩行のあり方を提案し、その特異な三段連詩を “Asphodel, That Greeny Flower” (1955) へと昇華させた。伝統のイギリス詩とは一線を画すアメリカ詩のリズムを追究した Williams の詩行を彷彿とさせる後世の詩人に、A. R. Ammons (1926-2001) がいる。アメリカ詩の真の発展を希求した Williams から Ammons へ託され果たされたものは何であったか。シンポジアのテーマである「アメリカのモダニズム詩と現代」を考察するうえで、本発表では、Ammons が、先達の Williams から詩作上どのような影響を受け、それをどのように吸収したのかを、両者に特徴的な作品とその詩作過程を踏まえて浮き彫りにし、アメリカ詩における断絶と継続がいかなる様相を呈するかについての解明を試みた。

1. Williams と Ammons の接点

Williams と Ammons は年齢が 40 歳離れているが、実際に面識があり、Williams が晩年、脳卒中や心臓発作を起こし、もう車の運転ができなくなっていた時期に、Ammons が数回 Williams をドライブに連れて行ったらしい。その時に Paterson を訪れ、長篇詩 *Paterson* (1946-1958) に登場するスポットや出来事に関しての解説も Ammons は受けたようである。Williams 作品との関わりについて、“I have never cared that much about the content of William Carlos Williams’s own writing, although I have borrowed so much from him in terms of form” と Ammons は述べている。Williams の詩の題材にはあまり興味はなかったようだが、詩の形式、フォームにおいて、Ammons が Williams から拝借した部分は多分にあり、定型詩が主流ではなくなった時代において、フォーム、すなわち詩の形式美を Ammons が Williams に求めていることが窺い知れる興味深い一節である。

2. “One:Many” (1962) から紐解く Ammons のアメリカ観

Ammons の詩は、Williams とは対照的に、ほぼどれをとっても哲学的傾向が見られるが、なかでも one と many は詩人にとって重要なテーマだった。万物は一者から流出したもの、で知られるネオプラトニズムをも想起させるこの one と many がコロンの分たれてタイトルに冠された詩 “One:Many” (1962) では、Ammons のアメリカ観が表出され、この詩のなかで、one と many は、そのまま the United States of America に置き換えて読むことができ、united の部分を強調すれば one、states の部分を強調すれば manyness となる。One が理想ではあるが、現実 is manyness であり、多数の州からなる一つの国アメリカは、多様であることがアメリカとしての一体感を作っている。タイトルのコロンは、おそらくはイコールと同義であろう。自身にとって one と many が重要なテーマであることを、*Sphere: The Form of a Motion* (1974) の 122 番でも Ammons は書いている。

I can't understand my readers:

they complain of my abstractions as if the United States of America
were a form of vanity: they ask why I'm so big on the

one:many problem, they never saw one: my readers: what do they
expect from a man born and raised in a country whose motto is *E*
pluribus unum: I'm just, like Whitman, trying to keep things

half straight about my country: my readers say, what's all
this change and continuity: when we have a two-party system,
one party devoted to reform and the other to consolidation: (下線部は筆者によるもの)

読者は、自分の抽象的物言いがアメリカ合衆国を空虚なものとして扱っていると不平を言うが、*E pluribus unum* (one, out of many) をモットーに掲げる国に生まれ育った人間に、この問題を捉えずにいろとでも言うのか、と苦言を呈す。詩人は続けて、読者は、なんだこの変わりようと続きようは、と言うけれど、二大政党システムでは、一方が革新に努め、他方は足固めに回るものである、と論ず。下線部の“this change and continuity”は、指示代名詞 this のあとに名詞が二つ続き、いわゆる二詞一意 (hendiadys) である。今回のシンポジアのテーマにも関わるが、アメリカとは、断絶と継続を繰り返しているというよりは、Ammons がここで定義づけているように、移ろい続けていく国、「移ろう」ということが継続されている国、ということができらるだろうか。

3. “Corsons Inlet” (1963) における形なき形

“Corsons Inlet” (1963) において、Williams から Ammons が多分に拝借したものが、どのような形、フォームで立ち現れてくるのかを検証する。タイトルの Corsons Inlet とは、ニュージャージー州南部にある入江を指すが、Ammons はここを頻繁に散歩した。歩くことを詩を書くことになぞらえ、詩人としての自身の生き方を、入江を歩きながら探し求めているようで、寄せては返す波のような詩行が、そこでの光景と思い思いの思索をゆったりと表現している。そこではありとあらゆる様々な自然の営みが展開され、この詩は、まるで花の開花や草木の芽吹きを何倍速かで注視しているような感覚を読者に与える。秩序が保たれた状態である一方で、刻一刻と変化し続ける森羅万象を、その保たれていた秩序が堰を切ったように崩れる自然界を、詩行そのものが体現している。筒型のように同じくらいの長さには整えられた後述の3行の手前にある“this,”をもって、詩人は心新たにし、“so that I make / no form of / formlessness”だから、形なきものの形を作らない、という結論に至る。これは、前述の詩における、“this change and continuity”という有為転変とも呼応し、詩はある種の形式を与えるが、私は形を与えずに詩を書く、と詩人は断っている。“Corsons Inlet”は、Ammons の、自身の詩のフォームに対するマニフェスト詩であり、生々流転を詩に書く試みであった。表現のあり方と詩のあり方が重なり、自分が詩を書くことを詩にしたメタ的な詩でもある。Williams には成し得なかったが、Ammons は、formlessness を一つのフォームとして受け入れた。Williams は自由詩に形を与えようとしたが、Ammons は形を与えずに書いた。言い換えれば、Williams は、どちらかという完成形 (outcome) への意識が高く、Ammons は、むしろ過程 (process) に関心をもっていった。

4. Ammons による pendulum 的詩行のあり方

自由自在に形をかえる Ammons のフォームだが、詩人は、“A Note on Prosody” (1963) という韻律についての論考で、“both ends [of the lines] are being played against a middle [...] A central poise suggests the pendulum: it is held in an instant of sight at either extremity of its swing, but what it is constantly operating around is the bottom point of its downward swing”と述べ、詩行を振子にたとえている。通常、行は両端が重要だが、Ammons 曰く、行の中心が肝心で、中心において行の均衡が保たれていて、振子のように下向きのスウィングが効いている。自身のリズムを原理化するには meter (もしくは measure) が不可欠となり、Williams は variable foot で脚・行・連を測ることを提案したが、meter はあくまでも測りであり、説明を施せば施すほど機械的になり、foot が伸び縮みでもするのか、などと揶揄された。自分のリズムの新奇性を知らしめようと四苦八苦した Williams から、フォームの観点で Ammons は実に多くを学んだ。Williams がこだわり続けたアメリカ詩の本質的問いに対する答えは variable foot であり、Williams の問いを引き継ぎつつ、答えは異なるが、Ammons が考えたのは pendulum 的な詩であった。結論として、Williams と Ammons において、現れは違うが、本質は共有しているといえよう。

おわりに

W. H. Auden (1907-1973) は、Williams も含むアメリカのモダニスト詩人7名を指名し、その誰もがそれぞれに異なり風変わり (“crankiness”) であり、下手をすれば自身の詩のパロディーに陥る危険性を指摘した。John Ashbery (1927-2017) もまた、Ammons 論考 “In the American Grain” (1973) において、アメリカ詩の群雄たちを “cranks” と “certified poets” に分類し、Ammons は “major cranks” への殿堂入りを果たすのではないかと述べた。これは単なる偶然であろうか、それとも、アメリカ詩は風変わり者の集まりであるという必然であろうか。現代のアメリカ詩においても、crankiness が「移ろい続けて」いるのかもしれない。

引用文献 : *The Complete Poems of A. R. Ammons: Volume 1, 1955-1977* (2017), *Set in Motion: Essays, Interviews, and Dialogues by A. R. Ammons* (1996), *The Criterion Book of Modern American Verse* (1956), *Modern Critical Views: A. R. Ammons* (1986)